明治・大正・昭和の初期に仏教を中心として取り組まれた社会福祉事業に関する歴史的研究（下）

――共生理念との関連で――

瀬川久志・三宅章介

幕末の女医光後玉江・法然上人の母方の家系を引くと思しき女医

美咲町錦織の興禅寺へ向う途中、田んぼにいる人に法然上人の母親秦氏のことを聞くと、興善寺の老僧が知っているのではないかという。興善寺では奥様が対応してくれたが、母が秦氏の血筋をひく光後玉江（こうごたまえ）という女医が、幕末から明治に活躍したが、遡ると秦氏へ繋がるかもしれないと言う。この時の調査は、法然の母親の秦氏の消息を訪ねてのことであったが、意外な展開を見せた。では、光後玉江という人はどういう人か。

美咲町のホームページには、次のように説明されている。「天保元年（一八三〇年）三月一一日に、光後（こうご）（秦）荊淑（けいしゅく）の長女として錦織で生まれる。幼名は浪子。母「いよ」の氏である秦氏は、あの法然上人の母の氏と同じで、つながりが類推される。弘化元年（一八四四）一五才の時に、津山藩医野上玄雄のもとで医術を学び始める。

当時既に錦織で医業学修所を開いていた父の姿を幼い頃より見て、医学の道を志したのかもしれない。しかしその父も、娘が二五才の時に亡くなる。その二年後、野上玄雄での学問を修め、翌年一月、晴れて大阪に出て開業する。名も、

開業の地大阪市北区玉江町に因み、玉江と改名する。しかし開業して半年後の七月、やっと軌道に乗り始めた時に、故郷より突然、母いよの病の知らせを受ける。急いで帰郷するが、看病もむなしく母を失う。そしてその悲しみを乗り越えて、同年興禅寺の住職戒般和尚に弟子入りを申し出て剃髪し、境内の仏間を使って医業を行い始める。

以後四七年間、郷里の人々の医療に捧げ、明治三八年（一九〇五年）一月三一日寂す。享年七七才。光後玉江自身が書き残したものとしては、明治一三年から明治三五年までの間に、彼女が診た患者のカルテ「処剤録」一八冊、明治一一年から明治三二年までの「患者届書控」一冊の、計一九冊がある。保存状態も良く、昭和五三年五月二二日に中央町の重要文化財に指定されている。

ちなみに同じ蘭学医で、父荊淑と交遊のあった箕作院阮甫は、彼女が生まれた年に津山の新開町で開業し（二九才）、彼女が一三才の時に江戸で「産科簡明」を出版している。

※貞観三年（八六一年）に創建された興禅寺は、室町時代には大般若教を刊行するなど、当時より有力な寺であった。この寺の「桜渓の間」と呼ばれる仏間から、近年、江戸時代の医学書や処剤録が多数発見された。それは江戸末期から明治にかけてこの地で開業した、女性蘭万医、光後玉江の残したものだった。特に箕作院甫の「産科簡明」は全国に三冊しか現存しないという貴重なものである。」

光禅寺については、はじめ嵯峨山にあり錦織氏から崇拝されていた。のち火災で焼失し現在地に移転したとされている。この錦織氏は武士の集団であり、法然上人の母の秦氏とどういう関係にあったのかは不明である。錦織地区のもう一つの寺院、弘法寺は新しい寺なので、分からないということであったが、この地域一帯は「こどもの頃に桑と、農家の二階で蚕は確かにやっていた」と言う。法然上人の母親の秦氏がこの錦織の出身であり、高貴な身分の方であったという旧知の仮説はより一層現実味を帯びてきたと言えよう。

光後玉枝については、ＮＰＯ日本地域振興会が、ホームページ[1]で、美咲町の本山寺、両山寺の紹介とともに、写真掲載を含めて紹介している。美咲町のホームページは、二〇一六年八月の時点ではアクセス可能であったが、本論文執筆時点では、何らかの理由でアクセス不可能となっている。

旅は人を育てる

二〇一五年一〇月、第三回目の調査紀行に取り組むに当たり、まず広島へ宿を取ったのは、目的地の島根県の益田へは、レンタカーを使えば最短で行けるからであることと、もうひとつは、石井十次がかつて音楽幻燈隊を引き連れて、山陰の興業を終えて浜田から広島へ、徒歩で帰路を急いだ街道を確認したかったからだ。これは、明治三一年七月末の真夏のことであった。（前掲『岡山孤児院物語』八二ページ）紙の上での認識と、彼等の旅の苦労との間のずれを少しでも埋めたいという思いがあった。

広島から国道一九一号線を北へ走り、一八六号線に入ると、道はいよいよ狭く険しくなってくる。明治の時代の十次たちの帰路とは逆方向に、中国山地の緩やかな坂を登って行く。道路は川と並行して浜田へと繋がっている。いくつか旧道が見えるが、十次たちは、楽器など大きな荷物をしょって、ここを歩いた。あるいは、馬車の力を借りたのだろう。

北上し、標高が上がるに従い、うっすらと色づいた蔦の紅葉が目に染みる。途中「プラットホーム」という、小ぢんまりとした道の駅に立ち寄るが、ここはかつて鉄道の駅があったところだ。ということは、十次の時代、茶店があったのかも知れない。興業収入で懐が温まっていたので、十次は子どもたちに、団子などを振る舞ったに違いない。仏教の修行僧の死を賭けた行脚にも似た旅ではあったが、これが十次の信念であったがゆえに、「父」の教えに忠実な子どもたちも、十次に従ったのであった。

昨年（二〇一四）八月二〇日の土石流で大きな被害の出た、広島市の可部線沿線の安佐地区の復旧現場を見ながら、我われは国道一九一号線を北上したのだが、この可部線は一九五四（昭和二九）年には、立ち寄った道の駅のある場所で開通しており、この当時は賑わっていた。一九七八年には、もっと北にある観光地の三段峡まで開通し、観光客を大勢運んでいたのだが、過疎化とともにジリ貧となり、現在は、広島市可部駅以北は廃線になっている。廃線にはなったが、いまだ残る鉄橋や線路のあとに、時の流れの哀れが漂う。十次たちが歩いたこの道の記憶を今に伝えたい、そう念じながら旅の行程を急いだ。

地域の人から教えられる

益田市の善正寺へ着いたのが、約束の一三時に五分前。間もなく法事を済ませた住職が車から降りて現れた。（下）では（上）に引き続いて、同寺院の地域へのかかわり方を述べる。若冠三〇才の体格の良い住職だ。住職のお祖父さんが、この地で、別の寺院にいたのだが、当善正寺に後継者がいなくなったのを機に、誘われるがままに、本願寺・中央仏教学院での修行を終え入山したという。

案の定、失礼な言い方ではあるが、荒れ寺で、また伯母さんの所有*になっていることもあり、大変な苦労をしたが、何とかここまで来たと住職は言う。檀家数二〇〇、山間地では多いのだが、過疎ゆえ不安も抱えながらやっている。

浄土真宗の教義をとくと拝聴したが、住職が言わんとする真髄は、間違うと失礼なので割愛する。大意は、檀信徒とのさまざまなふれあいを通じて、教えられつつ悟りを拓いていく実践だと言う。だから、聞き違いかもしれないが「煩悩とともに行きる」を信条としている。自分はあら煮が嫌いだったが、「自分があら、周りの地域の人が汁」で、やっとあら煮が食べられるようになったと笑う。

わさび田で村おこしをやっているような報道がされているが、そのことを正すと「それは知人との付き合いでやっている」ことで、寺院の運営という本業で地域とかかわっているとの確証を得た。議員に立候補するという話もあったそうだが、安易な地域振興とのかかわりは慎重に進めたほうがよいとの心象を得た。過疎とか限界集落など、嫌な雰囲気が漂う山陰の空にも、このような若い住職と出会うことで、透き通るような青空が戻って来た。

＊専門家に聞いたところでは、浄土真宗では庫裏や土地の私有が認められることがあるというが確証は得られていない。

三祖良忠上人

良忠寺のことに関しては、すでに「上」で紹介したが、ここでまず、開山者の良忠上人のプロフィールを示す。浄土宗大本山光明寺のホームページには次のようにある。良忠寺でいただいた資料にも、聖人のプロフィールがあり、一部を省略して紹介する（改行、西暦数字、句読点等は変更、ルビは筆者）。

「良忠上人は、正治元年（一一九九）七月二七日、石見国三隅庄で誕生されました―法然上人が六六歳の時（筆者）―一六歳で出家し、出雲国鰐渕寺で登壇受戒され、天台・密教を学び、つづいて各地に教えを求めて克苦修行の末、倶舎・律・禅を究め、また三論・華厳等を奈良に遊学し、特に法相を興福寺勝願院の良遍に学び、さらには高野山学頭・源朝より真言を受けるなど、辛苦修学の歳月を重ねられた。

上人三四歳の時、郷里へ帰るや、多陀寺に籠もって五年にもおよぶ不断念仏を修された。そのさなか生仏法師に会い、その勧めによって九州へ下向されることになった。それは、当時九州の筑後で、教化伝道に努められ、また宗祖・法然

上人の正意を継承されて二祖となられた聖光房弁長上人に会うためでありました。

良忠上人が、この聖光上人を上妻（福岡県）の天福寺に尋ねたのは、嘉禎二（一二三六）年九月、良忠上人三八歳、聖光上人七五歳のことであった。良忠上人は、二祖上人の許に修学すること一両年、浄土宗の正義をことごとく相承され、嘉禎三年八月ここに浄土宗第三祖となられたのである。

名残り多き九州の地を去り、師の諭誡を胸にして諸国の教化へ勇んで向かわれた。一度帰郷された上人は、約十年の間、石見・安芸（広島県）等の中国地方の教化に力をつくされ、ついで上人の心中期するところの関東弘教の遊化の旅に立たれた。

この間、十年余りにおよぶものである。さらに、文応元年（一二六〇）良忠上人御年六二歳の頃、数人の門弟とともに下総を後にして、当時の政治の中心であった鎌倉へ入られ、間もなく北条朝直の帰依のもと、悟真寺に住された。……良忠上人は、この悟真寺を中心として教線をはり、多数の門下を養成し、また著述にも専念された。御著百巻と称されるもの、そのおびただしい数の著作は、ひとえに宗祖の念仏義を末代に伝えんがためであり、そのご信念たるや、まことに熱烈なものがある。

上人七八歳、在京の門下の招請により、京に上がり布教、著述にと、超人的活動をつづけられた。この京都の滞在は重要な意味をもつものであった。この上京によって、京都の浄土宗の振興が果たされたのである。弘安九（一二八六）年、八八歳の高齢となられた良忠上人は、鎌倉へ帰られ高弟の寂慧良暁（じゃくえりょうぎょう）に、浄土の宗義を相伝され、念仏の弘通をたくし、翌弘安一〇年七月六日、八九歳をもって鎌倉に入滅せられた。三祖良忠上人の化教は、九州から関東までの極めて広範囲にわたり、上は皇室から下は庶民大衆に及び、念仏の声は都鄙に高まり山海に響き、また終生を著述に専注され「報夢鈔」と称される五〇余巻二〇部にわたる大著述を残され、浄土宗義の大綱を組織付けられたことは特筆すべき

ご功労である。これらの業績によって、今日の浄土宗教団へと発展する基盤を築かれたのである。[2]」

上人の生い立ちからの一生に関して、浄土宗総合研究所のホームページで「「三祖良忠上人御一代記」と題する詳細な法話が聞ける。上人は京都で長い一生を閉じたのであるが、その生まれ故郷である島根県三隅の地に再び蘇ったのであるが、それは宗祖法然上人と同様であった。

空外上人の墨刷り係―三上妙光尼

益田市と浜田市の間の、狭い道幅の林道を抜けて、良忠寺へ着いたのが秋の日が傾きかけた頃。三上妙光住職は、この前と同じように、本堂の戸を開けて待っていてくださった。

住職は夕方、所用があるらしく、取材は手短かに済ませることとした。まず、法然上人に遅れること六〇年、同地に生まれ仏教を学び、修行し、関東を中心に四〇数箇寺を建立、多くの人材を育成した良忠上人を讃え、明治一三年に建立された良忠寺の歴代住職を確認させていただいた。

ここで大事なことなのだが、あの山本空外が、妙光尼の先代の住職に多大な影響を与えていること、椎尾弁匡が同地に来たことがあること、また二人の住職（三上文匡、良匡）が弁匡の「匡」の字をもらっていることがわかった。寺院の継承に当たり得度をする場合、師匠の名前を一字譲り受けることはよく見られることではあるが、ここでもまた椎尾弁匡と良忠寺が線で繋がっているのではないかと考える。山本空外もまた、椎尾弁匡から二世代後の人なのだが、弁匡と同じ東京帝国大学の出身で、共通の学問的源泉を持つ可能性があることはすでに述べた。こうして、点は線となり面となり、後世に実践的教訓や教えが継承されていく。仏教の、時空を超えた人的ネットワークの屈強さを感じざるを得ない。

この人的ネットワークを通じて、明治中・後期・大正のころから活発に創設された仏教福祉社会事業が、他宗教・派にも影響を与えながら、後に国による社会福祉事業へと吸収・展開されていき、大きな社会的潮流として時代を引っ張っていったと言えるであろう。

妙光さんにとって、空外上人が極楽寺の別時（年に一回行われる寺院での集まり[3]）に導師として来ていて、経を唱えながら流暢に筆を走らせるのが印象的だったと回顧する。当時小学生だった妙光さんは、傍らで墨を摺ったのだそうだ。その厳粛でかつ和やかな光景が目に浮かぶ。

明治一三年に、良忠寺が建立された時の管長が三上鵜飼聖人。昭和二六年生まれの良匡さんが兄に当たる。良匡さんは児童養護施設の代表をしておられる。妙光さんは昭和三〇年に極楽寺で生まれ、二九年に祖父が聖喤（こう）寮を創設し、物心ついたころから寮の子どもたちと触れ合いたいと考えていた。こうして、寮をやってくれないかと言われ、知恩院の短大（華頂短期大学）へ進み、僧籍を取得した。弁匡さんも極楽寺へ来ていたとお兄さんが言っていたそうである。

それにしても、弁匡と良忠寺の交流のいきさつは何だろうか。あえて問う必要もないことだろう。浄土宗総合研究所の『浄土宗社会福祉施設総覧』三三ページに、大正八（一九一九）年、椎尾弁匡が創設した財団法人慈友会（児童養護施設）の事が出ている。椎尾耕匡は社会事業家でもあったのである。

児童養護施設創設のいきさつは、その頃、措置を要する子どもが増えていて「石見の子は石見で育てたい」というのがいきさつだったようである。ところで、個人的なことではあるが、筆者瀬川の妹（昭和二四年生まれで美作仏教自修会が発端で出来た報恩養老院の後継の児童養護施設の園長）の岸本延子は、妙光さんとは旧知の仲である。

無二的生活の空外上人

翌日四日（日曜日）、良忠寺とも縁の深い山本空外を記念して建てられた空外記念館を訪問した。この記念館は、空外師の提案もあって、気候がよい一〇月（一日から三一日）に、書籍や資料などの虫干しもかねて、期間限定で一般開放するのだそうだ。奈良の正倉院に習ったという。記念館の上に位置する隆法寺へ行き、抹茶の施しを受けた。房守の奥様がお茶とお菓子を運んでくれ、世間話につき合ってくださった。境内にはコスモスの花が咲き、絨毯のように広がった収穫間近の黄色い田んぼが心を洗う。本堂には、空外の書が掛けてある。年二回の別時のときに来寺し、経を唱えながら書を書いたのだそうだ。

記念館では、空外師の遺品やサンスクリット語の原書などが展示され、ゆっくり拝見していると何時間もかかりそうだ。「人間と自然」「無的人間」の二冊の非売品の書籍を購入し、記念館をあとにした。本稿では、空外上人の思想の奥義に触れたいと考えていたが、時間的に間に合わなかったことをお断りしたい。

労働運動家片山潜

労働者セツルメント事業で社会事業に実績のある片山潜の記念館を訪問した。誕生寺から東への至近距離にある。片山潜は共産主義運動では、世界的に知られた人なのだが、社会事業家としても足跡を残しており、今回の調査対象に加えた。美作大学の社会福祉の専門家・後藤氏も、美作地方の開明的社会活動家として片山潜の名を上げていた。片山もまた、我われの研究対象になる社会事業家のネットワークの中の一人なのである。慈善や慈愛に基づく社会事業や福祉に、主義主張（イデオロギー）の隔たりはないと考えるからである。

記念館のカギの管理をしている櫻井節子さんにお願いして、館内を見学させてもらい、いろいろと話を伺うことが出来た。片山潜は、同地の浄土宗の寺院の生まれで、両親が離婚したために親戚の片山家に預けられ、旧姓の藪木から片

山姓に変わった。美作仏教各宗自修会の生みの親の清田寂栄が、片山の父・水尾寂宣の娘と結婚したため、片山と清田は義理の兄弟（清田が片山の異母弟）ということになる。このことは、金光山多聞寺の寺史『金光山多聞寺』に記録されており、前掲研究ノートでもふれておいた。

美作地方の仏教社会事業の先駆者と労働運動家の片山潜とは線で繋がっていたのである。仏教社会事業家でありながら、忠君愛国の精神を説き、日露戦争に直面して国威発揚のために熱く戦争への協力を訴える清田が、共産主義を唱えて国外へ脱出し、モスクワのクレムリンで最期を迎える片山と義理の兄弟関係であったとは、実に驚きというしかない。

この地方が育んだ二人の逸材は、一方が仏教の社会事業家として、他方は国際的労働運動活動家へと成長していった。同地は偉人法然上人を生み出し、仏教の歴史に新しい霊峰を築いたのみならず、明治時代には、岸田吟行のような先見の明のある優秀な実業家をも生み出した。この背景には、戦乱の世に揉まれながらも、しぶとく行きぬいたタフな土地柄と、豊かな地域社会があったと筆者等は考えている。そのもっと遠因に、古代のこの地へ海を渡ってやってきた秦氏や海人など渡来人たちの、きらびやかな権力と文化拠点・京都からしても羨むほどの、先進的な技術や文化があったことは、また稿を改めて述べることとしたい。法然上人もまた、この地域経済・文化を築いた人たちの末裔であった。

津田白印の甘露院

津田白印が、地元笠岡の地において孤児の救済に乗り出したのは、石井十次が孤児教育会（後の岡山孤児院）を三友寺に開設した一九八七（明治二〇）年に遅れること一三年後の、一九〇〇（明治三三）年のことであった。白印が、九州などの寺院で修行を終えた後、三八歳のことであった。

孤児救済で活躍中の十次のことは、白印の耳にも当然入っていたに違いない。白印が幻燈隊を組織したのも、十次の

影響に他ならないと思われる。岡山と笠岡はつい目と鼻の先である。白印の孤児救済事業に関しては、坂本忠次の研究（巻末参考文献一七）で詳細が明らかであり、この小論では坂本の研究の域を出るものではない。

ここで付け加えるとすれば、白印が孤児救済を開始するに当たり依拠したのが、仏教の「福田（ふくでん）の思想」であり、参考文献四五の『福田会のあゆみ』発刊に当たり、福田会理事長の太田孝昭氏は、一八七六年に臨済宗の今川貞山等によって、「仏教上慈悲の趣旨に基づき、貧困無告ノ児女を修養する」として設立されたこと、一八七八年に臨済宗、日蓮宗、天台宗、真言宗、時宗、浄土宗の僧職者が数多く福田会育児院の創設にかかわるようになったと述べている。（傍点は筆者。発刊に当たってのあいさつ文より）

仏教福祉の初期において「仏教上慈悲」の精神が謳われたことは注目に値する。それは、坂本も言うように、明治以降の急速な工業化、すなわち資本主義化とそれに伴う貧困化など諸矛盾に対応して、仏教者が大同団結立ち上がったことを意味する。

津田白印の甘露院ゆかりの浄土真宗本願寺派浄心寺は、ＪＲ笠岡駅から北東へ三〇〇メートルの至近距離にある。津田白印が、一九〇〇（明治三三）年に育児院を最初に創設したのは、やはり同じく笠岡の本林寺であったが、まず、浄心寺を訪問することにした。白印が甘露院を設立したのは、石井十次が事情を抱えた女性遍路から前原定一を預かり、門田村三友寺に孤児教育会を設立（後に岡山孤児院）した一八八七（明治二〇）年に遅れること一三年の一九九〇（明治三三）年のことであった。浄心寺の山門をくぐり抜けると、左手に寺院の沿革が刻まれた石碑が立っており、一八〇六年、伊能忠孝一行が瀬戸内海の測量に向かう途中、同寺院に投宿した旨の文字が見える。由緒ある寺院であることが窺われる。

本堂脇に小さなお堂が建てられており、宮大工に訪ねると、阿弥陀堂だと言う。庫裏へ住職を訪ねると、生憎不在で

女性が愛想をしてくれたが、庫裏の手前にある建物が育児院として使われていた建物だそうだ。頑丈な造りだ。

境内に大きないちょうの木があり、その下の庵に、白印が晩年を過ごされていたそうだ。岡山大学から定年で関西福祉大学へ移り、仏教福祉の研究をしていた坂本忠次先生は、亡くなられたそうだ。甘露育児院最後の生き残りの方も、とうとう亡くなられたといい、当育児院も一時代を画したことになる。今回の調査では、白印が最初に甘露育児院を創設した法林寺、薬師如来の慈眼院は訪問出来なかった。慈眼院は、私の妹が経営する児童養護施設と懇意な付き合いにあり、明正から大正、昭和初期に形成された仏教福祉の地域ネットワークは、宗派、宗旨、時空を超えて今なお健在である。

落成式を迎える菩提寺

午後、菩提寺の奈義町へ向かう。晩秋というとまだ早いが、どんよりとした曇り空に「北気（きたけ）」がそよ吹き、冬の到来を予感させる。北気とは「きたけ」と読み、晩秋から冬の入り口にかけて中国山地を吹き降ろしてくる風のことで、しばしば小雨を伴う。法然上人若かりし頃、この北気が吹き抜ける中、勉学に励んだに違いない。また、地元の政情不安から、わが子勢至丸（法然上人の幼少の名とされる）を政敵から菩提寺にかくまい、可愛いわが子の安否に胸を打ちひしがれ、中国山地の脊梁那岐山に涙した母親の心情幾ばくであっただろうか。

対応してくれたのは、文化センターにいる教育委員会の寺坂さん。三〇代のまた若い職員で、子供のころ報恩明照会の研修施設で研修をやったと言って笑う。貰ったパンフレットを見ると、県指定の五つの文化財、町指定の三六の文化財があり、二八の中世の山城が指定されている。菩提寺のオオイチョウは、言うまでもなく国指定の文化財である。高貴山菩提寺、山梨、広葉杉、菩提寺城趾は一体として「菩提寺文化財」とみることもできよう。

このうち町によって現在行われているのが、オオイチョウの樹勢維持事業（補助事業）で、累計四〇〇万円をかけて、枝のつっかい棒の塗り替えなどが行われた。次に木道でこれは完成している。産業振興関係でトイレの全面改築が行われたことは、（上）ですでに報告した。杉の伐採も進み山積みされている。本堂と鐘楼の新改築は終了し、二〇一五年一一月には落成式が行われる。

浄土宗の担当は、寺院関係の部分で、庫裏の隣にあった集会場は撤去され、ダンプの砂利で整地された。寺院の担当は誕生寺で聞いた通り、勝間田の安養寺で、岡山教区で対応している。「政教分離で町と宗教に適切な距離を置くことが大事」、しかし「菩提寺は町の宝だから力を入れていく」と寺坂さんは言う。現場には、毎日行っているのだそうだ。住職は小笠原さんといい、庫裏に住んでいるのだそうだ。六〇過ぎで元気なのだが、多少健康に不安があると言う。古文書等文化財の事を聞くと、過去数百年の間に、宗派が変わったり途切れたりで、本堂の物は別にして、保存は期待出来ないようだ。

菩提寺は地域の振興とも関わっており、本年（二〇一五）八月一日（土曜）の午後四時から五時まで奈義町観光協会と、先に紹介した公益財団法人ともいき財団の共催で、往年のフォーク歌手高石ともやのオオイチョウ・ミニコンサートが、オオイチョウをライトアップして行われた。後日、落慶式の様子は、山陽新聞の記事で知ったのだが、以前、立正青葉学園の植えた桜の苗木がイノシシにだめにされたのだが、今回植えなおしに行ったと、園長の瀬川延子は語っている。

ともあれ法然上人ゆかりの菩提寺がこのように地域に開かれた場所として再整備されていることはまことに喜ばしいかぎりであり、仏教寺院、地域、自治体等の協力によって、貴重な歴史文化遺産としてその法灯を護って行く事が望まれる。

医療福祉の悲眼院

笠岡市から県道笠岡・矢掛線を矢掛方面に向かって走ると、旧山陽道沿いに、かつては山内十二坊を数えた標高一七五メートルの「薬師如来浄瑠璃山」がある。明王院は、この山の中腹にあり、参道石段下には、岡山県下最初の庶民救療事業である無料眼科診療所だった「悲眼院」もあり、歴史と伝統に裏付けられた民衆教化実践の寺として、現代にその法灯を受け継いでいる。明王院のプロフィールは以下のとおりである。

同寺の開基は壱漬大和尚。姓は大中臣正棟で、父親は従五位下備中守刺司（長官）治知麻呂で、和気清麻呂の曾孫に当たる。南都・薬師寺の戒明和尚を師として出家。承和二（八三五）年、大戒を受け、これを以て「浄瑠璃山」を開基した。白山権現から薬師如来像を受け開山したと伝えられ、鎌倉期の作で、中国地方三薬師の一つに数えられている。また、壱演和尚は常に金剛般若経を持誦していたとも伝えられている。

往古、浄瑠璃山内には薬王寺、円福寺、碇光坊、西林坊、金剛坊、西寺、辻の坊、畝之坊、奥之坊、里之坊、中之坊、遍照坊の十二坊があり、碇光坊が現在の明王院に当たる。このうち、金剛坊、遍照坊、西寺、辻の坊は大峰山系の修験の流れを汲む山伏の寺であったらしく、旧参道に「修験念願碑」が残されており、鎮守が権現であることから、権現信仰と密教の習合が行なわれたものと思われる。

ところが、この浄瑠璃山一帯は、南北朝の動乱の時代に、足利尊氏と甥の直冬の争いに端を発する「円福寺合戦」の戦場となった場所である。九州に逃れた直冬の挙兵を知った尊氏は、岩松禅師こと僧・頼宥を備後へ下向させ鎮圧に備えた。この頼宥が本陣を構えた地が浄瑠璃山であり、攻防が繰り返された。この戦いによって、円福寺は天平六（一三五一）年に焼失。寛文十二（一六七二）年に持宝院となるが、この間、碇光坊が円福寺を兼務している。

江戸時代に入ると、寺檀制度の確立により薬王寺、持宝院、碇光坊、西林坊だけが残り、他の寺は廃絶された。明和

二（一七六五）年には、金剛坊の本堂を碇光坊に移築し、本尊が不動明王であったことから「明王院」と改め、現在に至っている。

特筆されるのは、現在の高橋住職の祖父に当たる高橋慈本住職が、大正三年、周辺の医師や真言宗寺院に呼びかけて、岡山県下最初の庶民救療事業である無料眼科診療所「悲眼院」を創設したことである。現在は児童福祉施設となっているが、〝真言王国・備中〟における真言僧の社会活動として高く評価されている。（参考文献四九）

筆者はすでに津山市において大正八年一二月に大円寺住職が施療院を開設した経緯についてふれたが、実はその津山施療院の事業モデルがここで紹介する悲眼院であったことに言及しておきたい。当時の岡山県学務部社会課より「農村の救療施設悲眼院」という小冊子が発行されていたが、その姉妹編として昭和五年三月に「市街地の救療施設　津山施療院について」と題する、大円寺住職清田寂担（清田寂榮の弟子）の講演記録が同課より発行されており、今回これを入手することができた。この中に次のようなことが述べられている。

津山施療院創設に際して「サッパリ方角が立たぬ始末で、一時は殆ど絶望かと思ったのであります。その折大正八年夏、恩師清田寂榮師が備中悲眼院の院長渡邊元一氏から施療事業に関する委しいお話を伺って帰られたのを聞いて此処に漸く一道の曙光を認め得た。」（参考文献四六）

引用中に出てくる渡邊元一なる医師は、石井十次の孤児院で診療に当たった医師であり、当時のキリスト教仏教の垣根を越えた社会事業のネットワークは広範囲な基盤を有していたことが伺われる。

高橋慈本のプロフィールを坂本論文（「高橋慈本と悲眼院―救療から児童養護へ―」関西福祉大学　社会福祉学部『社会福祉学部研究紀要』第一二号）から要約して示す。

慈本は、一八七九（明治一二）年広島県芦品郡常金丸村の高橋金右衛門を父として生誕、一八八九（明治二二）年福山市明王院で龍池密雄師に会い入寺の発心、川上郡成羽村の実相坊に入った。その後高野山中学林に入学、一八九七（明治三〇）年卒業後岡山に帰り、後月郡井原町（現井原市）の常楽寺の住職となった。一九〇四（明治三七）年、同住職を辞職してキリスト教岡山教会でキリスト教を研究（大原家の奨学金を得たといわれる）、キリスト教青年会機関誌「操山文学」を編集し発行した。石井十次や大原孫三郎からの影響もあった。

その後、一九〇九（明治四二）年僧侶生活にかえり、小田郡北川村走出の明王院の副住職となる。この頃、笠岡町の医師渡辺元一と知り合い、施療病院の創設を相談した。渡辺医師は当時の笠岡市の津田白印による甘露育児院の孤児救済事業を助けた経験のある人である。一九一二（大正元）年明王院住職を拝命、豊野と結婚した。豊野は津田白印に絵を学び、白印の弟子でもあった。

一九一四（大正三）年一月、救療事業悲眼院を創設、専務理事となる。翌年、明王院を開放して「子供会」を創設、その後目の治療から、巡回助産婦、内科治療、児童保護事業へと発展した。一九一八（大正七）年、岡山県済世顧問の嘱託を受け、翌年禁酒団体「己未会」を組織し禁酒運動を行う。一九二四（大正一三）年、岡山県方面委員銓衡会委員となる。一九二五（大正一四）年には、社会事業功労者として岡山県知事から表彰を受けている。一九二八（昭和三）年、御大礼に際し社会事業功労者として内務大臣より表彰され銀盃を受けた。一九三四（昭和九）年、全日本方面委員聯名から社会事業功労賞を受ける。

一九三六（昭和一一）年、岡山県下仏教徒済世連盟会創立，理事に推される。大正天皇太后より方面委員功労者として硯管下賜さる。一九三七（昭和一二）年、全国方面委員会委員に、昭和一四年全国社会事業協会評議員に就任した。一九三九（昭和一四）年、悲眼院創設二五周年。二月中央社会事業協会評議員就任、閑院宮殿下より悲眼院創設二五周

年に当たり、功により賞状と金一封下賜さる。一九四〇（昭和一五）年、全日本社会事業聯盟会長より表彰、大政翼賛会岡山県支部参与、終戦の年、一九四五（昭和二〇）年、日本戦時報国会岡山支部副支部長に任命さる．同時に岡山県仏教会会長に任命、同年五月二三日遷化す。

戦後一九五〇（昭和二五）年、悲眼院は救療事業の歴史を閉じ，新たに虚弱児施設を開設し、一九九八（平成一〇）年児童福祉法の改正により児童養護施設となる。明王院の現住職高橋昌文氏は、一九七四（昭和四九）年滋本の長男の弘基（昭和一八年～四九年）のあとをつぎ、慈本からは三代目になる。この寺は一一六三年弘法大師の教えをもとに創立、慈本が三二代目，昌文が三四代目に当たる由緒ある寺である。

二〇一六年一二月、筆者は同寺と持宝院を訪問した。山陽道笠岡インターを出て、北へしばらく行った、なだらかな丘陵地帯の中腹にある。かつては修験道が入ったとされているが、その薬草や医術の伝統が活かされて眼の施療院の開設となったのであろう。明治から大正、昭和にかけての社会事業の展開は、古代から中世へかけての、修験道、聖、仏教者たちの永年の実践と慈悲の精神の上に、培われ展開されたことを思い知らされる。それゆえに、キリスト教やセツルメントとも自他不二、ともいきの関係で、手を携えて進んだのであった。

武者小路の共生農園

二〇一五年一一月一三日、中部国際空港より宮崎へ向い、武者小路実篤開村の「新しき村」を訪問した。用件を伝えると、さっそく資料館へ案内してくださった。資金の関係で、なかなかよい土地が見つからなかった実篤に、農業実習教師の津江市作が土地を紹介したのが開村の契機だと言う。川があることも土地選定の条件だった。武者小路一行が、石井十次の未亡人はじめ日向孤児院の関係者から暖かい歓迎を受けたこと、その後開村にいたるいきさつが、大津山国

夫の『武者小路実篤、新しき村の誕生』（参考文献四一）三章に詳述されている。

この地が、「共生農園」と呼ばれていたいきさつについては、定かではないが、興味を引く事実であった。前掲書には武者小路が東京で「ある男」から紹介されたと記されているのみで、事実関係は不明である。「共生」という言葉が使用されていることに注意したい。椎尾弁匡が共生運動を始める前の話である。武者小路と親交のあった同じ白樺派[4]の作家・有島武郎が、北海道に父が残した農園も共生農園と名づけられていることが『農場開放顛末』に記されている。有島自身は彼の農園を「共産農園」と命名したかったようだが、なぜだか共生農園になったと述べている。『農場開放顛末』はインターネット図書館「青空文庫」で閲覧できる。[5]

『農場開放顛末』の末尾に述べられているとおり、武者小路実篤の共生農園は、よく組織せられた共生思想に基づく実践であったことがわかる。神谷によれば椎尾弁匡が共生会を立ち上げたのが大正一一（一九二二）年、武者小路の新しき村が大正七（一九一八）年であった。有島の共生農園（狩太農場の開放）は、前掲書によれば、「武者小路氏の新しい村は、ともかく理解した人々の集まりだが、私の農園は予備知識のない人々の集まりで」と述べている。

日本に共生概念を導入した三好学

このことから分かるとおり、有島の共生農園と新しき村とが時を前後していることを考えれば、これら関係者の共生思想の中身は別として、一つの社会的潮流であったとは言えないだろうか。ちなみに、三好学が生物学的な意味で「共生（symbiosis）」を述べたのが、明治二一（一八八八）年であったと言われる。

久保輝幸は「Lichen は如何にして地衣と翻訳されたか How Lichen Was Translated as Chii」[6]において、「In 1888, in his article, MIYOSHI Manabu suggested a new equivalent term, Kisoukin, to refer to lichen (algae-parasitized

fungi　地衣類）. In the article, he proposed the term Kyosei as the Japanese translation of symbiosis. Ever since the late 1880s, Kyosei has been used as the Japanese biological term for symbiosis.」（同論文の抄録）と述べている。三好学が一八八八年の論文で、symbiosis の訳語として共生という言葉を用いたので、生物学用語として「共生」が使われるようになったというのである。三好学が一八九五年から東京帝大理学部で教鞭をとっていたことを考えれば、椎尾弁匡は容易に三好学の「共生」論を知りえたはずである。

また、同じく浄土宗の渡辺海旭と共生思想との関連もある（菊池結「渡辺海旭の社会運動と現代」参考文献四七）。渡辺海旭は明治四四（一九一一）年三月、浄土宗労働共済会を設立している。

共生農園の継承

松田省吾さんは、若い時分、玉川大学の田原国芳の全人教育（人を教える前に自分を自然の中で教育しなければ）に感化された。禅の空き寺に入ろうかとも考えたが、社会科の教師になるために、農耕を始めたという。共生の生き方を今も守っている松田さんの生活を紹介しよう。二匹の犬と暮らしている。地域の活動で結構忙しいのだそうだ。先日もあるイベントで、杉の表札に名前を書いて一〇〇円で出品したら、コストを割ってるじゃないかと言われたと笑う。屈託のない人だ。豚は有名レストランに出しており、米と野菜それに豚が今の松田さんの生業だ。二〇頭ほどが飼われている。もう一組の入植者がいるそうだが、人影はない。共生の生活は、飾り気のないつつましさを基本としている。

埼玉の新村に六年、ここに四〇年を過ごした。後継者は目処がついているそうだが、自立自助で行くと言う。石井十次の茶臼原の記念館に通じる道を平らな道にするのを手伝ったり、春には児童養護施設の生徒が遠足でやって来るなど交流は続いている。建築、土木、農耕のことなら何でも自分でやると言う。共生と自給自足はメダルの裏表の関係のよ

うだ。家も廃材を利用して自力で建てた。同人誌で創作活動をやっており、筆の短編を発表している。本棚には実篤ほか漱石などの全集が、ずらりと並んでいる。「文学青年なんです」と松田さんは笑う。

記念にと檜の板に、毛筆で書を書いてくださった。一時間は話し込んだだろうか、お昼が近づいたので、お礼を言って、「新しき村」をあとにした。奇しくも今日は開村記念日。まさか今日が開村記念日とは知らず、これも縁（えにし）と思い、「ともいき」とも思い、また「縁起」という仏教用語を思い出し不思議な感覚にとらわれた。次の目的地、茶臼原高原へ向かう。

十次の理想郷―茶臼原

さて、上・下に亘る仏教社会事業の旅もいよいよ佳境に入る。石井十次が諸般の事情から段階的に岡山孤児院をこの地に移したことはすでに述べた。孤児院はその歴史的使命を遂げて太平洋戦争後は関係者により友愛社として十次の精神を引き継ぎ、さらに発展させるために福祉事業を営んでいる。

友愛社の責任者で、十次のひ孫にあたる児嶋さんに面会することが出来た。ともいき研究所のことを話すと「私たちも同じ事を目指しています」とパンフレットを指差す。紹介された資料館へ行き、案内の女性からレクチャーを受けた。

三五ヘクタールの土地に児童養護施設（写真）、保育園、老健など様々な施設、農場などがあり、訪問当日も、オルガン演奏で老健を慰問するなど交流は続いている。畑も耕されて指導員の指導で農耕を継続している。土曜日なので、児童養護施設の子どもたちが、杉の木に十次の

言葉「人を恨まず――」を刻んでいる。通路には花が咲き乱れている。

十次の居宅に案内してもらい、寺子屋式道場、十次の臨終の部屋を見た。点滴を吊るした天井のカギが生々しい。庭には十次お手植えの梅の木があり、剪定も子どもたちがやっているのだそうだ。宿泊設備もあり、雑魚寝だが泊まることが出来る。研究者の菊地さんがよく利用すると言う。来年度また訪問する旨伝えて茶臼原をあとにした。石井十次については（上）で委しく説明したので、ここでは茶臼原の概要紹介にとどめるが、十次没後の現在も、十次の実践と福祉に賭けた情熱は今も健在で伝承されていることを強調して筆を置くことにしたい。福祉国家の実質が形骸化し、崩壊しつつあるとは言え、地域福祉のネットワークは今も健在である。これらのネットワークは、明治・大正・昭和の初期に、仏教をはじめ宗教の「ともに生きる慈悲のみこころ」によって育まれ、形成されたものだ。歴史は今弁証法的な原点回帰が必要だと言えないだろうか。

注

1 〈http://blogs.yahoo.co.jp/kmd1101y/65893622.html〉（二〇一六年一二月二七日　アクセス）

2 〈http://komyoji-kamakura.or.jp/〉（二〇一六年一二月二七日　アクセス）

3 ＊浄土宗のホームページによれば、別時念仏会とは、日時を定めて、身体やこころを清浄にして念仏行に励む意識をもち、ひたすら阿弥陀さまのみ名を称え、念仏を常に称え続け、お念仏によって心をきよめる行事で、日常の勤行（ごんぎょう）に対して別時念仏会というとされている。
http://jodo.or.jp/naruhodo/event/index13.html　（二〇一五年一二月二八日　アクセス）

4 白樺派　明治四三（一九一〇）年創刊の同人誌『白樺』を中心にして起こった文芸思潮のひとつ。また、その理念や作風を共有していたと考えられる作家達の集団。

5 〈http://www.aozora.gr.jp/cards/000025/files/1149_17875.html〉（二〇一六年一二月二九日　アクセス）
6 『科学史研究』第Ⅱ期　四八（二四九号）、一-一〇、二〇〇九-〇三-二五）日本科学史学会

〈参考文献・論文・資料〉

一　清田寂栄『旭旗と法幢』円光寺出版、一九〇四年
二　神谷正義「椎尾弁匡師と共生思想」『印度学仏教学研究』第四九巻第一号、平成一二年
三　「皇室財産」「皇室領」「寺社領」（『日本史大事典　三』平凡社、一九九三年、所収）
四　吉田祐二『天皇財閥―皇室による経済支配の構造』学研パブリッシング、二〇一一年
五　山口幸照「大正期・昭和初期の仏教社会事業　真言宗智山派の仏教社会事業」、『現代密教』、第一三号
六　岡本多喜子「昭和初期における養老事業の動向――全国養老事業協会の成立をめぐって」　日本社会事業大学社会事業研究所年報、一九八一年
七　椎尾辨匡「融和思想の推移と充実すべき事業」岡山県、一九二七（昭和二）年　同「共生の原理と組織」（『椎尾辨匡選集第七巻』）、一九七二年　同『椎尾辨匡選集第九巻』椎尾弁匡選集刊行会、一九七三年
八　山本空外『いのちの賛歌　山本空外講義録』無二会、二〇〇七年
九　小野修三「済世顧問制度と笠井信一」『近代日本研究』一九八九年
一〇　圭室文雄「檀家制度の成立と展開」『明治大学教養論集』通巻四四七号、二〇〇九年
一一　鵜飼秀徳『寺院消滅　失われる「地方」と「宗教」』日経ＢＰ社、二〇一五年八月一五日
一二　橋本秀樹『お寺の収支報告書』祥伝社新書、二〇一四年
一三　『川崎祐宣の遺産』川崎医療福祉資料館、平成一九年
一四　江草安彦『ゆずり葉のこころ―私にとっての医療福祉』中央法規出版、二〇〇七年
一五　福田会のあゆみ編集委員会『福田会のあゆみ　明治九年から歴史を未来へ』社会福祉法一六人福田会、二〇一五年
一六　坂本忠次編『津田白印と孤児救済事業』吉備人出版、二〇一〇年

一七　坂本忠次「高橋慈本と悲眼院――救療から児童養護へ――」関西福祉大学『社会福祉学部研究紀要』第一二号
一八　拙稿「研究ノート　岡山県美作地域・自修会による仏教福祉事業に関する研究」『東海学園大学研究紀要　第一九号　社会科学研究編』二〇一四年
一九　拙著『青空が輝くとき―太平洋戦争を生きた人々の物語』ブイツーソリューション、二〇一三年
二〇　藤吉 慈海『颯田本真尼の生涯』春秋社、一九九一年
二一　山陽新聞社『岡山孤児院物語』山陽新聞社、二〇〇二年
二二　和田登『石井のおとうさん　ありがとう』総和社、二〇〇四年
二三　菊池義昭「岡山孤児院の財政史研究」共栄学園短期大学社会福祉学科、一九九九年
二四　柴田善守『石井十次の生涯と思想』春秋社、昭和三九年
二五　袖山榮真『浄土宗報恩明照会　百年の歩み　そして次の百年へ』財団法人、浄土宗報恩明照会、二〇一三年
二六　中村元『慈悲』講談社学術文庫、二〇一〇年
二七　J・Jルソー『エミール　上中下』岩波文庫、一九六二年
二八　武者小路実篤『人間らしく生きるために―新しき村について』新しき村、一九九四年
二九　武者小路実篤、大津山国夫『新しき村の創造』富山房百科文庫、一九七七年
三〇　リン・マーギュリス『共生生命体の三〇億年』草思社、二〇〇〇年
三一　Margulis, Lynn, Early Life, Jones and Bartlett Publishers, Inc: illustrated.1982
三二　JAMES LOVELOCK, THE AGES OF GAIA A Biography of Our Living Earth, BANTAM BOOKS, 1988
三三「医療福祉の地平切り開く」『山陽新聞』山陽新聞社、二〇一五年三月一七日朝刊
三四　片山潜『片山潜　歩いてきた道』日本図書センター、二〇〇〇年
三五　江草安彦監修『果てしなく続く医療福祉の道　川崎祐宣に学ぶ』日本医療企画、二〇一五年
三六　山本空外『無二的人間』財団法人光明修養会、一九八四年
三七　山本空外『人間と自然』財団法人光明修養会、一九九三年
三八　創立五〇年記念誌編集委員会『創立五〇周年記念誌』、社会福祉法人津山みのり学園、二〇〇五年

三九　江草安彦『改訂版 岡山福祉の群像』山陽新聞社、二〇〇一年
四〇　瀬川久志『法然上人生誕の地美作国に関する研究』ＫＤＰ出版、二〇一七年
四一　大津山国夫『武者小路実篤、新しき村の誕生』武蔵野書房、二〇〇八年
四二　藤吉慈海『颯田本真尼―布施の行者』春秋社、一九七〇年
四三　中国新聞社編『中国山地（上・下）』一九六七年
四四　社会福祉法人　石井記念友愛社『石井十次資料館研究紀要　石井十次没後一〇〇年児嶋虎一郎生誕一〇〇年記念号』第一六号、二〇一五年八月
四五　社会福祉法人福田会『福田会のあゆみ　明治九年からの歴史を未来へ』二〇一五年
四六　岡山県学務部社会課『市街地の救療施設　津山施療院に就いて』昭和五年
四七　菊池結「渡辺海旭の社会運動と現代（宗教者は社会にどのように向き合ってきたか　〈特集〉第六十七回学術大会紀要）」
四八　Lester I Tenny（2007）, My Hitch in Hell. POTOMC BOOKS
　　邦訳　息吹田歌子ほか訳『バターン遠い道のりのさきに』梨の木舎、二〇〇三年
四九　高野山真言宗備中宗務支社『高野山真言宗備中寺院めぐり』平成六年
五〇　吉田 健二、岐阜県恵那市三好学博士生誕一五〇年記念事業実行委員会『「桜ノ博士」三好学物語』ＰＨＰ研究所二〇一二年
五一　科学朝日編『殿様生物学の系譜』朝日新聞社、一九九一年

キーワード：共生、仏教福祉、社会事業、美作仏教各宗自修会、菩提寺、法然上人

（せがわ　ひさし　東海学園大学　経営学部教授）（みやけ　あきゆき　東海学園大学　経営学部名誉教授）